

鮎の生態を知り、自然と対話する 鮎釣りの醍醐味に夢中

有限会社 小林商店
(名古屋支部)
代表取締役

小林 清一 さん



魅力は難しさ

今回は名古屋市南区にある有限会社小林商店 代表取締役の小林清一さんに鮎釣りのお話を聞きに伺いました。会社に着くと、お人柄が表れているような温かな笑顔の出迎えを受け、楽しくお話を伺えそうな予感。はじめに作業場を拝見し、事務所へ。
(事務所の書棚に50冊ほどの単行本が並んでいる)

—小林さんの趣味は鮎釣りと同じでしたが、読書もご趣味なんですか？

小林 そうですね。なかなかゆっくり読む時間はできませんが、読もうと思って集めた本です。

—内田康夫さんのものばかりですね？

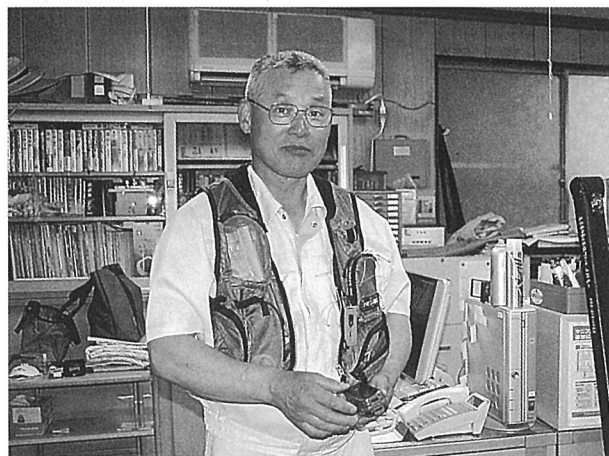
小林 彼の本は、推理小説ですが、結末を読者が想像できるようなものが多いので好きです。でも今もっぱら女房が読んでいます。

—鮎釣りもご夫婦でなさるんですか？

小林 いえいえ、鮎釣りは友人と行きます。先日も行ったんですが、川の中で転んでひざを縫う怪我をしてきたところですよ。

—それは大変ですね。では、しばらく鮎釣りはお休みですか？

小林 今日、抜糸をして、風呂もOKが出ました。風呂がOKということは、川もOKだと思ってます(笑)。



—なるほど…確かに水ですが…。そこまでも川に行きたいという、その魅力を教えていただきたいのですが、まず鮎釣りを始めたきっかけは何だったんですか？

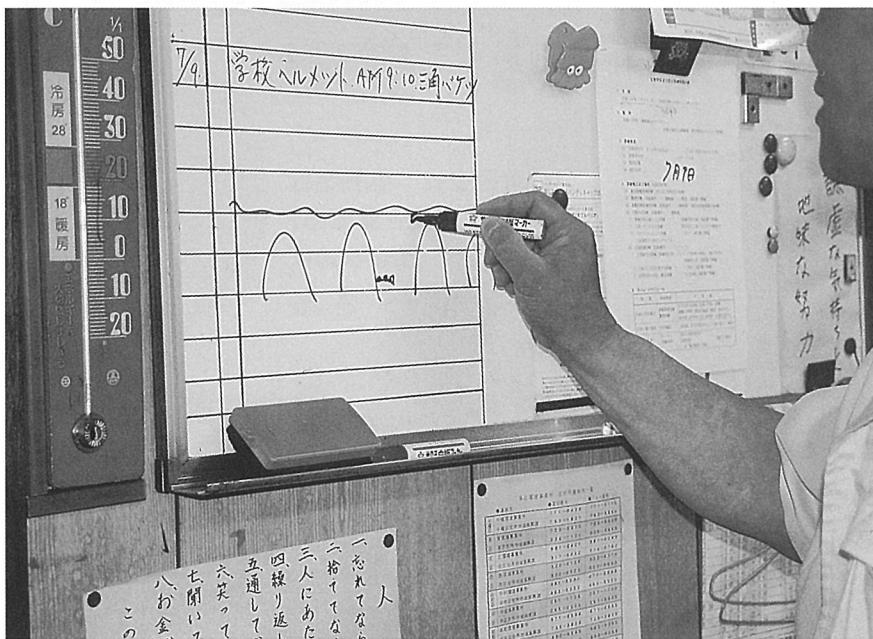
小林 今でも師匠ですが、取引先の水野タツオさんに「一度鮎釣りやってみないか？」と誘われたのが始めです。

—それですぐに魅力に取りつかれた？

小林 はい。もう、すぐ。

—その魅力はどんなところだったんですか？

小林 一言で言うと「難しかった」ということです。海釣りのようにはすぐ釣れません。あまりの難しさに12年間も熱中しています(笑)。簡単に説明すると鮎釣りというのは、糸の先に、おしりのところに針をつけたおとり鮎をつけ、自然に泳がせます。そのうちにおとり鮎は岩間の鮎の棲み家に入って行きます。そうすると自分のテリトリーに侵入者が来たと思ひ込んだ鮎が体当たりをしてきて、おとり鮎についた針に引っかかって釣れるという仕組みです(事務所のホワイトボードに図を描いて説明)。



—ところで、鮎釣りでのハプニングなんかも伺っていますか？

小林 ハプニングですか？そうですね…年に数回、釣り上げた鮎と一緒にすっぽんや鯉が釣れるということでしょうか。

—え、一緒に釣れるんですか？

小林 はい。鯉やすっぽんは鮎を食べるんです。ですからすっぽりと口に入れた瞬間釣られたところでしょうね。

—つまり鮎の習性を利用した釣り方法なんですね。

小林 そうです。ですからどれだけ仕掛けを上手につくっても釣れるものではありません。自然におとり鮎を泳がすことができるかというのは非常に重要になります。

—糸や針が付いた魚を自然に泳がせると…相当難しそうですね。

小林 はい。私は2~3年かかりました。

自然と一体になって

—釣り方法を伺っていると、鮎そのものの生態を熟知していないと難しそうですね。

小林 鮎の習性を知らないことには釣りになりません。例えば、鮎がどのへんにいるかというのを見

るには、岩についているコケを見ます。成長した鮎はコケしか食べませんから、コケが食べられているかどうかを見れば、その辺にいるかどうか分かるというわけです。その食べ跡を「はみあと」といいます。ただ、そんなに簡単にはわかりませんが…(笑)。それに、流れの強弱や水の温度でも鮎の動きが変わってきますから、こちらの動きも変えていかなくてはいけません。

—まさに五感を駆使して鮎と対峙するという感じですね。

小林 水の音で流れを聞き、目を凝らしてコケを見、音や香り、風を感じる。自然と一体になっている印象です。

—それは得した気分ですね。

小林 去年も1匹すっぽんを釣って、近所のすし屋で料理してもらいました。

—鮎釣りというのは期間がありますよね、シーズン中はどれくらいのペースで行かれるんですか？

小林 ここのところは毎週行っていました。



—毎週ですか…。川にはどれくらい入るんですか？

小林 だいたい朝の6時か7時くらいから夕方の5時くらいまで入っています。

—ずいぶん長丁場ですね。その間、あの長い竿を持って川の中に入っているというのは体力も相当必要ですね。

小林 そうですね。ただ同じところにじっといるわけではなくて、移動したり釣り方を変えてみたりと試行錯誤の連続です。

—確か鮎釣りには許可証が必要でしたよね。

小林 川に入る許可証が必要です。日券、年券というものがあって、それぞれの川で許可を受けなくてははいけません。(許可証を拝見する)

—写真入りなんですね。こうして制限があるとシーズン中は行かなくては、という気持ちになりますね。まさに今シーズンですが、今後の予定もビッシリですか？

小林 はい、と言いたいところですが、夏休みに入ると町内の行事がたくさん入っていて、そちらが中心になります。

—町内行事ですか？

小林 実は町内会長をやっているんですよ。それに、仕事柄こういう工場をやっていますと、どうしても音などで近隣の皆さんにご迷惑をかけることがあります。ですから夏になると工場で夏祭りをやったり、近所の盆踊りに出かけて行ったり、地元の皆さんに喜んでいただけることを心がけています。なのでしばらく週末は行けません。でも、皆さんに日頃の恩返しをできると思えばそういう時間も大切だと思っています。

—近隣の皆さんのことも熱心に考えてらっしゃるんですね。

小林 やはり気持ちよく仕事させてもらっていますから感謝しています。

—近所の皆さんと親しくなさっているというのは小林さんのお人柄



ですね。今日は鮎釣りから町内のお話まで、いろいろありがとうございました。シーズン真っ盛りの鮎釣り、今後もたくさんの釣果をお祈りしています。

鮎釣りというのはいろいろな約束事がある中で試行錯誤して成果を出すという、まさにビジネスにも通じるような印象を受けました。小林さんの鮎釣りに対する熱意はきっとお仕事などにも生かされているのではないのでしょうか。ご自慢の9M50の釣竿などの道具と共に、小林さん手描きの図解入りでの趣味の鮎釣りを熱く語っていただいた楽しい時間でした。

